

Web of Science, Enjoy JOISを導入して - 理工学図書館と電子メディア利用 -

碓 氷 喜 信（理工学図書館担当課長）

はじめに

「人々は驚くことを愛する。そしてこれこそ科学の種である。」とはR. W. エマーソンの格言であるが、昨今の科学技術、とりわけITの急速な進歩には驚かされ続けている。但し、それを愛しているかは別として。

最近のITの進歩により、叡智の創造と伝達を使命とする大学にとって情報インフラを確立し、さまざまな知識情報を発信して社会的ニーズに応えることが使命となっている。大学における知識集約組織としての図書館はこの使命を具現化し、既存のリソースに加えて新たにデジタル情報、インターネット情報等を提供することがサービスの主幹となりつつある。

理工学図書館・中央図書館での経緯

早稲田大学図書館内でもこの数年間にこれらの新しい情報資源について関心が高まっている。今年2月に館内の「電子メディアスタディグループ」が、全学利用の電子メディアの利用促進に焦点を絞った報告書を作成した。これは電子メディアの利用をさらに本格化させるための具体的プランや提言をまとめたもので、今後進むべき方向について具体的な議論を行うためのたたき台となるべき報告書と言えよう。

キャンパス図書館（分館）たる理工学図書館ではこれを先取りする形で4年前より本格的なデジタル情報、インターネット情報等の提供を始めている。ここ数年理工学図書館では外国雑誌を維持すること（『ふみくら』No.63参照）に大きなエネルギーを注ぎ、ともすれば守りの姿勢に終始していると受け取られがちである。しかし、実際には外国雑誌問題を抱えつつも、担当者の地道な努力により電子メディアの提供を少しずつ積み上げてきている。これは大学の施策としての情報インフラの整備によることの他に、理工学部・理工学総合研究センターなど大久保キャンパスの教員・研

究者・大学院学生などの理解と要請などによるところも大きい。

理工学図書館で最初に電子ジャーナルの提供を始めたのは1996年であった。ある助手からの「購入している外国雑誌が無料でインターネット経由で電子ジャーナルとして研究室から利用できるの、図書館として登録して欲しい。」という要望がコトの始まりであった。このときはネットワークに詳しくない依頼者の的確な指示と情報教育研究センター（当時）のネットワーク担当者と図書館担当者などの協力により導入にこぎつけることができた。しかし、導入による大学ネットワークへの負荷と今後の進展など不安をかかえながらのスタートであった。

一方、電子データベース（オンラインデータベース）の試験運用は前年の1995年に実施していたが、この年から本格的にネットワーク運用を開始し、「MathSciNet」、「IOP (Inst. of Physics)」、さらに「OCLC FirstSearch」の導入・提供をスタートさせている。また二次資料を中心にCD-ROM資料8誌のスタンドアロン利用も開始している。

このころ中央図書館でも「OCLC FirstSearch」のネットワーク運用が始まっているので、この1996年は早稲田大学図書館における電子メディア本格運用の元年といえるかもしれない。

また1998年には理工学図書館で独自にサーバを導入し、これを介して全学に化学系二次データベース「CA (Chemical Abstracts) on CD」のネットワーク提供を開始したことも特筆すべきことである。

外国雑誌全文データベース

その後、1999年には早稲田大学図書館として、研究教育と一体化した情報サービスを提供していくことを目的として大学へ「アクティブライブラリ」構想（『ふみくら』No.64参照）が提案され、近い将来図書館よりさまざまな電子メディア提供、

発信がなされることが予想される。

この1, 2年では全学でさまざまな電子メディアの提供が始まり、理工系だけに限ってもElsevier Science社の「SD 21」、Academic Pr.社の「IDEAL」などの外国雑誌全文データベースの提供がスタートし、前記理工学図書館が独自に契約してきた無料の電子ジャーナルと併せると、理工系電子ジャーナル約800誌がネットワーク上で利用できるようになった。これは中央図書館と各キャンパス図書館との協力の成果でもあり、従来の図書館サービスを越えた情報・資料の提供が実現したことでもある。

「Web of Science」等の導入

しかし、大久保キャンパスの教員・研究者の電子メディア情報への関心は高く、雑誌全文情報のみならず、前記「CA on CD」以外の二次文献情報にさまざまな要望、意見が寄せられていた。ここで注目されていたのが「Science Citation Index」(SCI)である。

SCIは自然科学・工学系学術論文の各書誌的事項(論文名、著者、キーワード等)に加えて、引用文献データも索引化されていることから、引用をキーとして研究の流れや重要度・影響度も調査でき、教員・研究者から大学院学生まで多岐にわたって利用されていた。理工学図書館ではこのSCIを2000年度までCD-ROM(スタンドアロン利用)と書冊で提供していたが、このWeb版たる「Web of Science」の評判がキャンパス内に浸透するにつれ、その導入を望む声が比例して高まってきたのもごくごく自然なことであった。

しかし、実際にどの程度の利用があるのか、確たる予測ができなかったが、ベンダーであるISIジャパンの協力申し出があったのを機会に、学術情報課が中心になってトライアルを実施することにした。「Web of Science」にはSCIのみならず、社会科学、芸術・人文系のデータベースも含まれていたため、大久保キャンパスのみならず全学の教員にトライアルを依頼した。トライアルアンケート結果から大久保キャンパスの教員の多くから「Web of Science」導入に強い希望があることがわかった。そこで中央図書館、理工学図書館などが購入予算を持ち寄り形で導入が実現できることに

なった。さらにこれまで書冊とCD-ROMをスタンドアロン利用していた「科学技術文献速報」も所沢図書館の協力によりWeb版たる「EnjoyJOIS」も全学でネットワーク利用ができることとなり、電子メディア利用に大きく前進することとなった。これらの電子データベース利用の評判は良く、理工学図書館としてはさらに理工系電子データベースの導入を検討することになる。また、従来から積み上げてきた無料電子ジャーナルも今後さらに増誌して提供していく予定である。

変化をもたらすもの

こうした電子メディア情報の提供・発信はさらに加速し、図書館のコア・コンピタンスとなることが予想される。これまでの「蔵書所有と人的サービス」という関係から「ネットワーク・コンテンツと電子サービス」という関係に移行するが、これからこの情報の中味(コンテンツ)の質・量が問われることになるのではないかと。

こうした変化は図書館にどんな変革をもたらすのだろうか。これはITの進歩というスタンスから観れば、単に図書館サービスの変化というよりもパラダイムシフトという意味合いさえ含んでいるのではあるまいか。社会、経済、技術の変化・進展に対して大学組織、さらに図書館組織も一層の変革が求められ、業務のリエンジニアリング、アウトソーシング、スクラップアンドビルドなどが進行することも予想されよう。こころせねばなるまい。

